資料５－３

大学院部会（第 118 回）における主な意見
（令和７年６月１７日）

１．第 12 期の審議及び第 13 期の審議の方向性について

事務局より前期の大学院部会での審議状況やこれまでの大学院制度等の変遷及び今期の審議事項（案）について説明ののち、意見交換が行われた。

２．意見交換における主な意見

（１）社会の多様な場での活躍、社会との接続の在り方について

○　博士を目指すということは、将来、社会のリーダーになっていくということであり、また、そういった博士を教育するということは、日本の将来のリーダーを育成していくということであるという意識をもってカリキュラムをつくっていくべき。

○　博士は専門性が高いのはもちろんのこと、汎用的な能力が重要である。

○　博士人材が研究とエンジニアリングで行き来するような流動性も実現できていくことが望ましい。

（２）大学院教育の質向上・評価の在り方について

○　大学院の教育の質向上についてどのような枠組みで評価するか。国際的な質保証の枠組みとの相互の互換性のようなことも今後大事になる。

○　様々なソフトスキルも持つ人たちが、決して専門能力を持つ人たちより劣っているということではないという認知が社会に進むことが重要。

○　AI やオープンサイエンスを含む研究手法の進化に対応した教育体制を構築し、時代に即した研究能力を評価できる体制が必要。

（３）大学院組織の基盤強化の在り方について

○　世界中から優秀な人材がどこでどのような活躍をするか、そのネットワークに日本の大学院がどのように参画するかが重要。

○　学問の枠を超えた分野横断的な組織構築と人材育成が重要であり、従来の学問分野に縛られない大学院組織の再設計が必要。

（４）学士・修士 5 年一貫教育制度の在り方について

○　人社系の学部学生は、３年生で事実上勉強が終わるように見える現状がある。学部と博士前期課程の接続、進学者を増やすための制度設計が必要。

○　博士まで行きたいと思わせる学部教育が重要。

（５）その他

○　コロナ禍で世界の高等教育の地政学的な変化がある。政治や経済の動きが高等教育の在り方にも大きな影響を与える中で、我が国としての大学院教育の在り方をどう考えるかが重要。